

連珠っておもしろい

九段 河村典彦

●第20回●

吉澤衆三郎さん追悼

前号に引き続き、追悼文を書くことになってしまった。今度は「鬼の吉澤」と謳われた、あの吉澤衆三郎さんである。ご存じない方のために、念のため少し紹介しておこう。吉澤衆三郎さんは、全日本連珠連盟理事長をされていた。連珠の旧字を使っている事からわかるように、第一世人高山互楽（黒岩涙香）が名付けた連珠という名前を使った、オリジナルルール（十

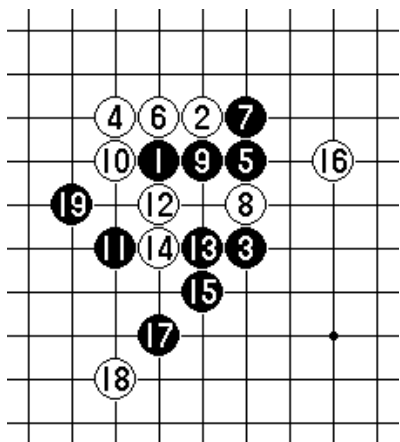
普通であった。その後、十

五道四々禁というルールが台頭してきて現在の形になっているが、今でも十九道四々勝ちの団体は存在している。それが全日本連珠連盟という訳である。吉澤さんはその永世名人でもある。吉澤さんは昭和初期に連盟に所属し活躍されたが、終戦後会社員の間はずっと休珠（約30年）され、60を越えてまた復活された。

吉澤さんと言えば、「王座戦」が有名である。2つの団体の統一を目指して時の名人同士が対戦を行った歴史的な一戦である。当時最強時代の中村名人が相手であり、どちらが勝つか非常に注目された。NHKや雑誌の取材が入ったと記録には残っている。「鬼の吉澤が天才中村をかわす」と、「かわす」の用例で辞書に例文が載ったぐらいである。今日は吉澤さんを偲んで、王座戦の一戦をご紹介しよう。

●王座戦第3局（昭和55年3月29日）

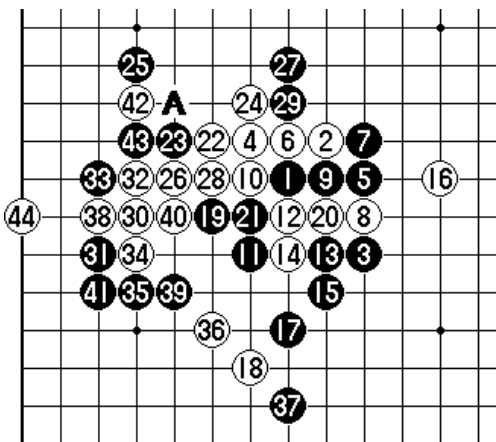
四半世紀以上も前である。中村名人は当時もう既に敵なしの状況であった。戦前の予想は圧倒的に中村ノリではなかっただろうか（想像だが）。しかも第1局は松月黒番で、第2局は長星白番で圧勝しており、早くも有利となっていた。



流星黒番ではあるが、中村名人は積極的に動いた。黒15の見せ手に対し、白16は絶対で、他の手では黒勝ちとなる。ここで黒19まで

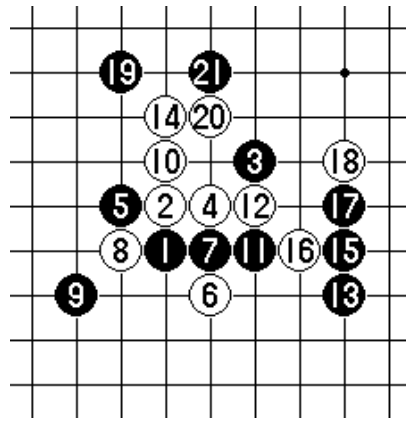
が中村名人の作戦だったの

だろう。確かに白は困っているように見える。

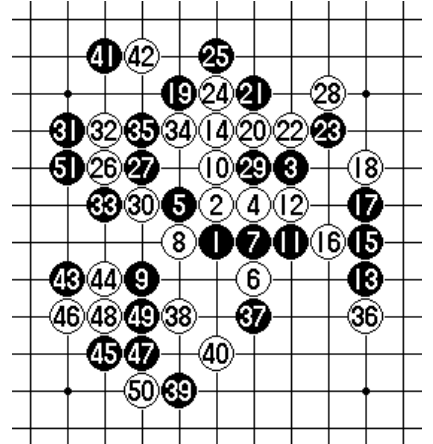


白20はやむを得ず、黒21とさらに手を入れられては長期戦の様相に見えた。しかし、ここからの白の構想が素晴らしかった。白22と伸びて24が黒の三々を狙った絶妙手である。黒25で26なら、白A後43で白勝ちとなる。黒25は最強の抵抗だが、白28が勝ちを決める密集である。白36に対し、ど

こを止めても禁手になる。
 ●王座戦第4局（昭和55年
 3月30日）
 続けて第4局もご紹介し
 よう。



疎星で見慣れた黒5だが、
 続けて黒7はあまり見かけ
 ないがもちろん強い。白8
 に黒9が深慮遠謀の一手。
 対する白10は、中村名人ら
 しい積極的な一手。黒11、
 白12の交換の後、黒13が何
 とも言えず味のある防ぎで
 ある。白14とあくまで攻め
 ようとするが、黒は21まで
 打ち、何となく外側に回っ
 ている。



続けて白26まで攻め立
 てたものの、黒27の防ぎに
 どうとう白はあきらめたの
 か、28から防ぎに回った。
 しかし、白36は明らかに右
 に偏りすぎて、すかさず打
 たれた黒37があまりに絶
 好点。これで攻守が入れ替
 わった。白は良く防いでい
 たが、気落ちしたのだろう
 か、黒51まであっけなく土
 俵を割ってしまった。
 結局、第1期王座戦は4
 勝3敗の成績で、吉澤名人
 に軍配が上がった。続く翌
 年の第2期王座戦も西山名
 人を相手に4勝2敗の成績

で見事勝ちを収めた。その
 後王座戦が行われなくなっ
 たのは残念だが、吉澤名人
 が実力的にはNo.1であ
 ることを見事に知らしめた。
 こういう歴史があることを
 知っていたので、私は常々
 吉澤さんにお会いしたいと
 思っていた。何がきっかけ
 かは覚えていないが、吉澤
 さんが発行する「連珠」（以
 前は「聯珠道」）を購読した
 のがきっかけで、何度か手
 紙のやり取りはしたことが
 あった。（不詰めを指摘等）
 最近になって、「連珠」誌を
 発行している鶴岡秀将さん
 より「一度吉澤さんに会っ
 ていただきたい」との嬉し
 い提案があり、7月8日に
 実現する運びとなった。
 蔵田九段と一緒に行く事
 になったが、残念ながら吉
 澤さんは入院の際にころん
 だらしく、起き上がること
 が出来ない状態であった。
 思ったより小柄な方であっ
 たが、連珠の話になると、

まったく違和感無く話され
 ていた。吉澤さんも私に会
 うのを楽しみにしていたら
 しく、「こんな無様な姿をさ
 らして残念です」とひどく
 恐縮されていた。私はお会
 いできただけでも感激であ
 ったが、もう少し早く来る
 べきであったと思った。
 いろいろ話をうかがった
 が、印象的だったのは「結
 局、連珠は研究と読み（実
 戦）の繰り返しである」と
 という言葉である。鬼のよう
 な研究を知っているだけに、
 その言葉には重みがある。
 また、中村氏に伺ったところ、
 「吉澤さんはとにかく気
 迫がすごかった」という感
 想で、きつとその実戦は、
 研究、読み、気迫とすべて
 に揃っていたのだろうと推
 測される。最後に「早く良
 くなつてください。」と手を
 握ったが、それからわずか
 20日足らずでお亡くなり
 になるとは、本当に残念で
 ある。ご冥福をお祈りする。